

大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】 大学教育推進プログラム
体系的な HPS 養成教育プログラムの開発

静岡県立大学短期大学部

平成 23 年度 事業成果報告書

目 次

第 I 部 プログラム概要

第 II 部 平成 23 年度実施報告

1. 平成 23 年度事業実績
2. 海外現地調査
3. HPS シンポジウム結果報告
4. 遠隔地双方向授業システムの安定的運用と
教材・啓発用ホスピタル・プレイ映像制作
5. ホームページの運用
6. ホスピタル・プレイ研究活動支援

第 III 部 資 料

1. HPS シンポジウムの様子
2. 新聞記事

文部科学省

大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム

「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発」

プログラム概要

プログラム概要

平成 21 年度文部科学省「大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム」に採択された「体系的な HPS（ホスピタル・プレイ・スペシャリスト）養成教育プログラムの開発」は、これまでの HPS 養成教育事業で培った教育力と育成した人材などを最大限に活用し、HPS としての専門性の確立・向上及び医療現場での専門職としての定着を追及する一貫した HPS 養成教育プログラム構築：第 1 ステップ「HPS 入門講座」、第 2 ステップ「HPS 養成講座」、第 3 ステップ「上級 HPS 講座」に向けての準備プロジェクトである。

当該プロジェクトでは、看護師や保育士養成を行う医療・福祉系短期大学の個性や特色を踏まえ、本学学生を対象とする HPS 入門講座の開講を目指す。そこで、短期大学士教育課程における学士力の底上げとそのための教育力を向上させるため、1) 養成教育モデル、2) 効果的教授法モデル、3) 産学連携による小児医療モデルを開発・実行し、その評価を行う。さらに、他大学や病院等との連携・協働のもと、ファミリー・センタード・ケアの理念に貫かれた実践的な養成教育プログラムを開発するために必要な内容や方法等を開発する。

1. 背 景

静岡県立大学短期大学部では、平成19年度より文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」委託事業として、離退職保育・看護師を対象とする「HPS養成教育プロジェクト」を実施した。日本初の本格的なHPS養成講座の実施により、事業最終年度の平成21年度までに全5クールが終了し、62名の講座修了生を輩出している。そのうち47名がこれまでわが国の医療現場等でほとんど注意が払われてこなかった、子どもや家族に寄り添うホスピタル・プレイを病院や福祉施設において積極的に展開し、子どもにとって医療との関わりが肯定的な体験になるように働きかけるという革新的な試みにチャレンジしている。

小児医療での「Family Centered Care（家族中心の医療福祉）」の理念を実現するため、本学の次段階の取り組みは、総合的・多層的なHPS養成教育プログラムを完成させることである。他大学との連携も視野に入れ、1) 本学の専門職養成教育でHPSの視点を身につけた看護師や保育士等の養成、2) HPS養成事業の継続による本格的なHPS育成、3) 医療ケアとプレイサービスをマネジメントする上級HPS（プレイ・コーディネーター）を輩出する一連の戦略的人材養成教育プログラムの構築が求められている。

2. 目 的

「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発」は、HPS としての専門性の確立・向上及び医療現場での専門職としての定着を追求する、一貫した HPS 養成教育プログラム構築に向けての準備プロジェクトである。平成 22 年度以降「学び直し」HPS 養成事業を継続的に実施し、この事業を HPS 養成過程の第 2 ステップに位置づける。その次ステップとして、経験・実績を積んだ実力を有する HPS を対象に、困難ケースに対応できる上級 HPS の育成を第 3 ステップで目指す。そして本学学生対象に基礎資格の段階で HPS マインドをもった看護師・保育士などを養成する第 1 ステ

ップを HPS 入門講座とする。

これら体系的な HPS 養成教育プログラム構想に向け、HPS 養成教育モデルの開発、教育方法モデルの開発、そして産学連携による小児医療モデルの開発が本取組の目的である。

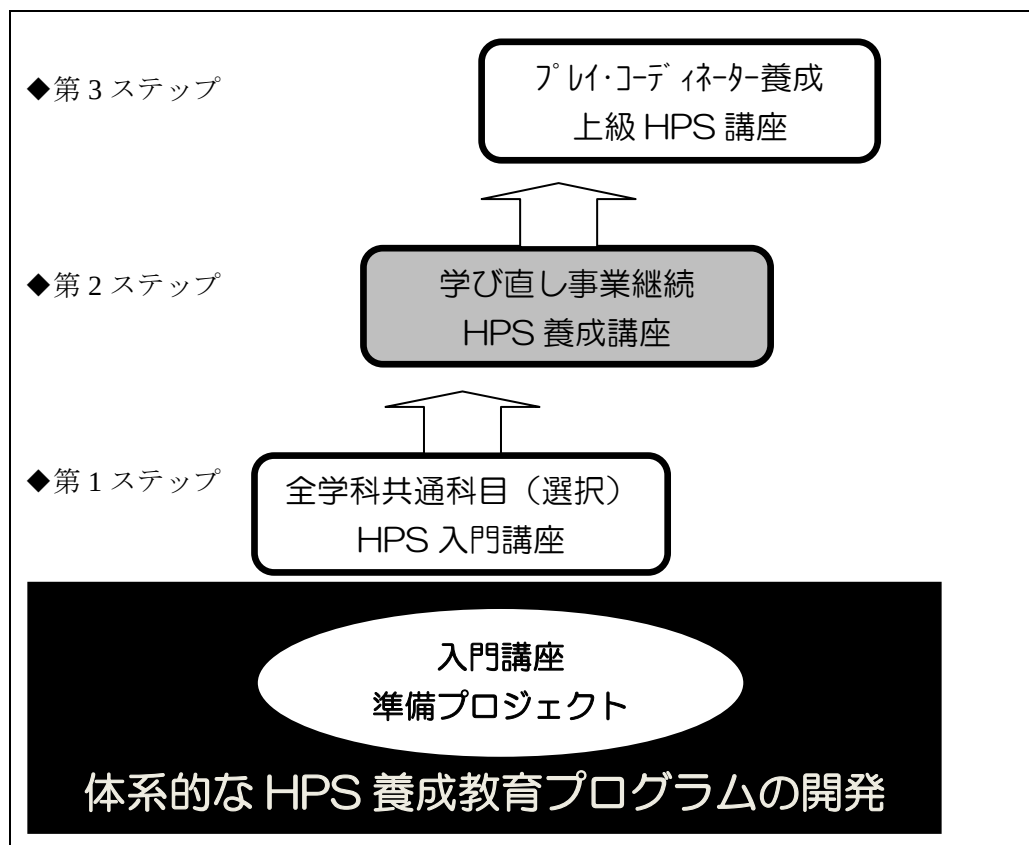


図 1. 体系的 HPS 養成プログラム構想

3. 各開発モデルの概要

本プロジェクトは、以下の教育3モデルの開発を平成23年度までに行い、その後は本学教育の柱として、学士力確保や教育力向上を目指すHPS入門講座を開講すること及び第1から第3ステップからなる体系的HPS養成教育プログラム構想の実現を大きな達成目標とする。

1) 養成教育モデルの開発

本学の医療・福祉系専門職養成教育の中に HPS 入門講座を取り入れ、主体的に講座を履修する学生に HPS としての視点から対象者中心のケアに関する知識・理解、対人援助技術、専門的倫理・価値、クリティカルで創造的な思考力を身につけさせるための養成教育モデルを開発する。その内容は、明確なラーニング・アウトカム指標に基づき、履修カリキュラム、教育目標・内容、標準テキスト、補助教材、学習ポートフォリオについて協議・検討し、設定及び作成を行う。そのため、英国ホスピタル・プレイ・スタッフ協会との連携により、英国 HPS 養成大学から視察及び打ち合わせに講師を招聘し、その後は運営実行委員が英国研修を行う。このモデル開発により、医療・福祉系短期大学の学士力確保の一つのあり方を示すことも大きく期待される。

2) 効果的教授法モデルの開発

HPS 入門講座における教育方法が効果的で適切に実施されることを目的に、入門講座で講師を依頼する学び直し HPS 修了生への教授法研修、ティーチングポートフォリオ技法、小グループによる双方向型アクティブラーニング学習法、地域課題（退院後の在宅重症心身児・家族の孤立化など）解決に向けたサービス・ラーニング手法、遠隔地授業実施に向けたシステム等を開発・導入し、試験的に短期大学での教育に取り入れていくことで評価・改善を目指す。そのため、優れた教授法を先駆的・実践的に大学教育に取り入れている国内大学等での研修や講師派遣を行う。このモデル開発により、HPS 養成教育に関わらず、大学教育の講義・演習・実習科目の先駆的・実践的な教授法を明確化することが成果として期待される。

3) 産学連携による小児医療モデルの開発

HPS 修了生及びその所属する病院・施設とのこれまでの相互連携を生かし、1) 病児及び家族を対象とする病院に特化、2) 障害児及び家族を対象とする福祉施設に特化、3) 自宅療養する子ども及び家族を対象とする在宅支援に特化した HPS の専門性とその養成教育の確立等を目指す。これらを総合的に進め、英国 HPS 養成教育機関との協力とともに、第 1 から第 3 ステップまでの HPS 養成教育プログラム構築について検討し、段階ごとの教育目標や内容を明確化した養成モデルを開発する共同研究を行う。病院・福祉施設・在宅療養での子ども・家族中心の医療ケア実現の実践・研究を進め、研究報告を行うとともに、協働で HPS の社会的認知度を高めるパンフレットを作成する。

4. 予算

各年度予算は以下の通りである。

年度	21 年度	22 年度	23 年度	合計
申請額	24,000,000 円	13,000,000 円	12,000,000 円	49,000,000 円

(GP 運営実行委員 江原勝幸)

平成 23 年度
実施報告

平成 23 年度事業実績

1. 実施体制整備

本補助事業 3 か年の活動展開で根幹を成すのが実施体制の整備である。その体制は、平成 19 年度から 21 年度に本学が採択された「離退職保育・看護資格保有者のキャリアアップのための HPS 養成教育事業」（平成 19 年度文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」）の実施体制を基盤に、本取組の内容等に即してより発展させたものである。その事業実施体制及び評価体制は、図 1 に整理した。

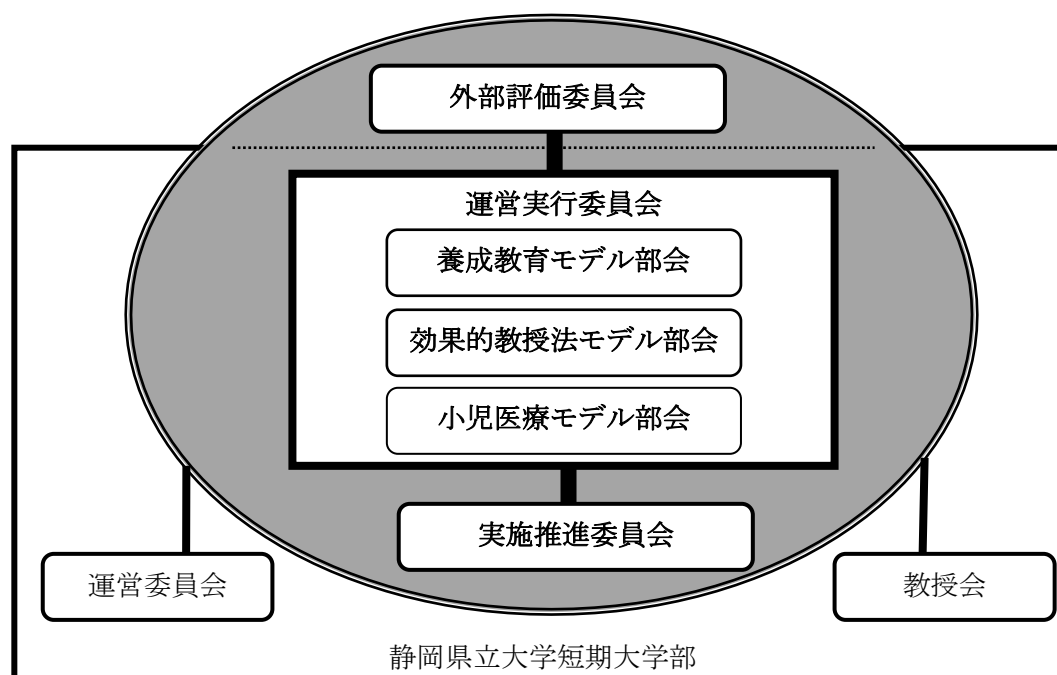


図 1. 事業実施体制及び評価体制

事業実施体制の整備として、本学教授会の審議を経て、本事業「実施推進委員会設置要領」が承認された。この実施推進委員会は、本事業の事業内容や本事業の運営体制、進捗状況、経理内容、本事業終了後の取組などの事項を実施する組織を規定する実施要領を定めることにより、本事業が円滑・適正に実施されることを目的とするものであり、委員には学部長（委員長）、本事業取組担当者、各学科・専攻等教員群からそれぞれ選出された教員各 1 名、その他部長の指名する者とし、学長にはオブザーバーとしての委員会参加を求めている。

平成 21 年度第 1 回の実施推進委員会では「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発実施要綱」が定められ、この実施要綱に基づき、本事業の中核的な活動展開を担う学内委員会を規定する「運営実行委員会要領」及びその運営状況等の重要事項に対して助言・評価する外部委員会を規定する「評価委員会」がオーソライズされ、本事業を実施する組織体制が整備された。

運営実行委員会委員には、これまでの本学 HPS 養成教育運営実行委員会委員を充て、学内教員及び学外の有識者等で構成される（1）養成教育モデル部会、（2）効果的教授法モデル部会、（3）産学連携による小児医療モデル部会を組織し、入門講座実施に向けた教育内容、教育方法、産学連携による小児医療プロジェクトについて協議・検討を行う組織体制を整備した。図 2 は、事業実施体制の組織図及びその構成員である。

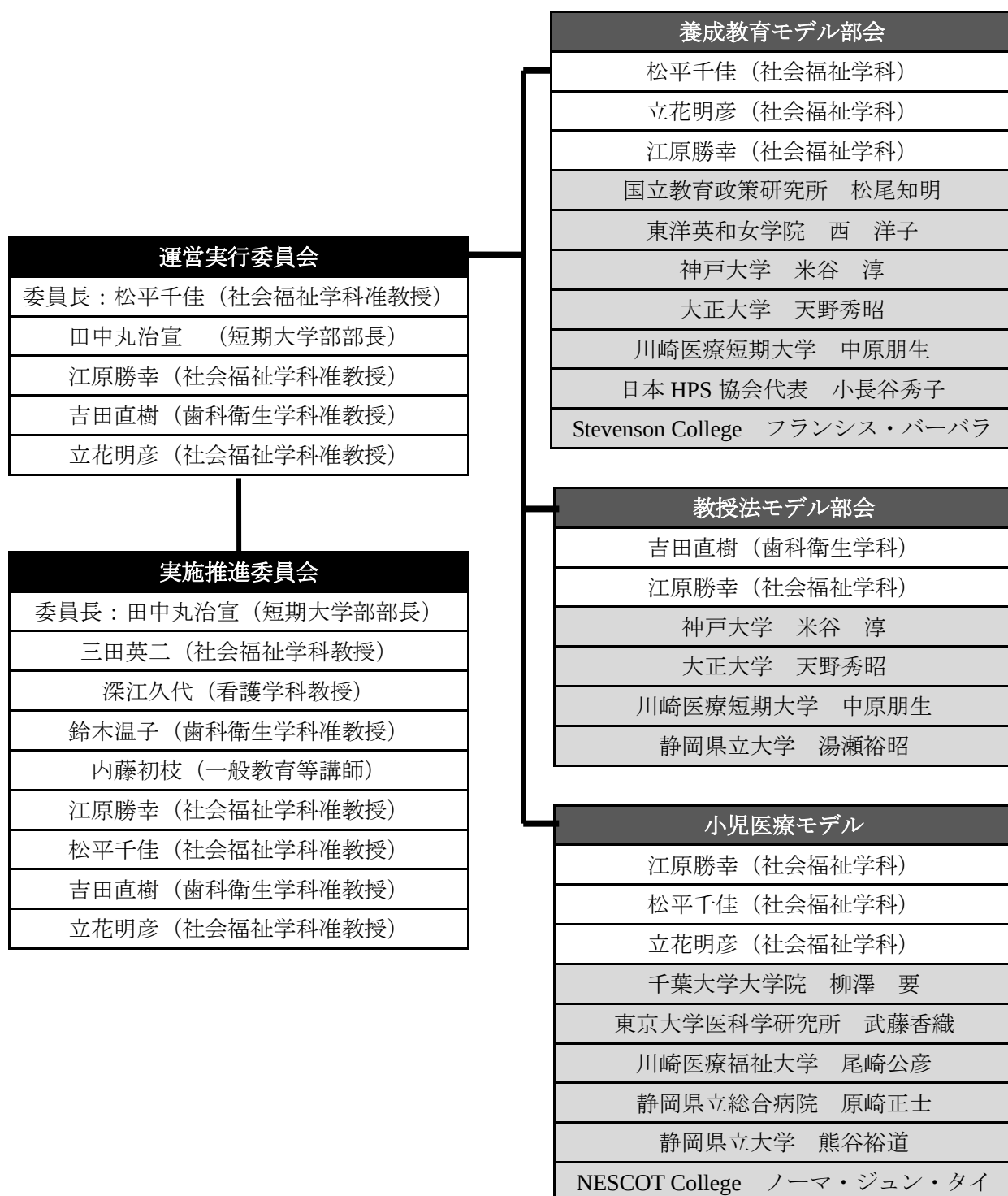


図 2. 事業実施体制

2. 事業実績

平成 23 年度事業実績として、運営実行委員会委員及び本学事務局（事務部長、学生室長、総務室長、総務室長補佐、会計担当者など）が参加する運営実行委員会を開催し、本取組の各事業等の最終検討及び協議を行った。実施推進委員会は四半期に一度定期的に開催し、そこでの報告・承認を経てその開催月の本学教授会に報告され、本学教職員への本取組の周知を図った。

各モデル部会については、3 モデル開発部会の活動として、遠隔地双方向授業システムを活用した合同モデル部会を 2 回開催した。各モデル部会での活動状況の概要は以下の通りである。

- 1) 養成教育モデル部会では、HPS 入門講座の科目設定に向けた授業の目的や到達目標について検討し、授業内容について標準テキストの項目設定や学習ポートフォリオの内容について協議を行った。なお、HPS 教育カリキュラムに係る項目や科目は合同モデル部会で提示され、協議と検討が重ねられた。
- 2) 効果的教授法モデル部会では、HPS 啓発用映像制作、少人数の意見交換を基盤とする学生主体の学習法について主に検討した。遠隔地双方向授業システムの試験的運用は毎月最低 1 回以上の頻度で実施し、Skype 通信の導入、簡易版マニュアル作成、不具合の対応などに役立てた。
- 3) 小児医療モデル部会では、小児医療チームの中で HPS の専門性を発揮するための役割・機能を明確化し、医療者などにそれが理解されるための手法(シンポジウムの開催)について検討した。また、HPS 入門講座のアウトカム指標設定のため、HPS 養成講座の受講生による実習日誌や修了生レポートなどを用いて一覧表にまとめた。ここで得られたアウトカム指標は合同モデル部会で示した。

また、本事業外部評価委員に対するヒアリング調査を実施し、運営実行委員会及び各モデル部会の活動について報告し、今後の活動展開に向けて意見を聴取した。外部有識者の意見等は、その後の運営実行委員会や各モデル部会での活動に反映させ、HPS 入門講座や体系的な HPS 養成教育プログラムの開発に役立てた。

3. 部会開催記録

内 容	開催日	出席者
合同 モデル部会	9 月 29 日	松尾部会員、米谷部会員、中原部会員、小長谷部会員、柳澤部会員、尾崎部会員、武藤部会員、熊谷部会員、江原部会員、松平部会員、立花部会員、吉田部会員、HPS 事務局、大学事務部
合同 モデル部会	3 月 29 日	松尾部会員、米谷部会員、中原部会員、尾崎部会員、松平部会員、江原部会員、立花部会員、吉田部会員、HPS 事務局、大学事務部

4. ホスピタル・プレイ・スペシャリスト 教育カリキュラム(案)

教 育 科 目	HPS マインド (第 1 ステップ)	HPS 養成講座 (第 2 ステップ)	上級 HPS 養成講座 (第 3 ステップ)
子ども学			
現代社会と子ども (0.5)	○	○	
子どもの権利 (0.5)	○	○	
子どもの健康と発達 (1)	△	○	
※HPS 項目一覧対応：1、2、3、4			
遊び学			
遊びとは何か (0.5)	○	○	
臨床としての遊び (0.5)		○	
遊びの力 (0.5)		○	
ホスピタル・プレイの発展過程 (0.5)	○	○	
※HPS 項目一覧対応：5、6、7、8			
ホスピタル・プレイを使った援助と方法			
日常の遊びと治癒的な遊び 理論と方法 (0.5)	△	○	
プレイ・プレパレーション 理論と方法 (0.5)	△	○	
デストラクション・セラピー 理論と方法 (0.5)	△	○	
処置後の遊び 理論と方法 (0.5)	△	○	
個別支援 理論と方法 (0.5)	△	○	
きょうだい支援 理論と方法 (0.5)	△	○	
ホスピタル・プレイ実習 (1)		○	
※HPS 項目一覧対応：8、15、18			
療養環境学			
子どもの療養環境 (0.5)	○	○	
子どもの療養環境づくり (0.5)		○	
※HPS 項目一覧対応：13、14			
小児医療とケア			
子どもの疾病と障害 (0.5)		○	
チャイルドセンタードケアとは何か (0.5)		○	
チームアプローチとは何か (0.5)		○	
※HPS 項目一覧対応：15、16			
HPS の専門性			
プレイ・プログラムの立案と実施 (0.5)		○	
反省的実践力の形成 (0.5)		○	
HPS の倫理 (0.5)		○	
ケース研究 (0.5)		○	
遊びを用いた家族支援 (1)			○
痛みの軽減 (1)			○
パラティブケア (1)			○
障害児(発達)に対する専門的支援 (1)			○
遊びのマネージメント (1)			○
※HPS 項目一覧対応：9、10、11、12、18、19			
実習指導方法			
評価方法 (1)			○

海外現地調査

調 査Ⅰ：

(1) 日 程：2011 年 7 月 4 日～2011 年 7 月 11 日

(2) 調査地：英国(ロンドン)

調 査Ⅱ：

(1) 日 程：2011 年 10 月 11 日～2011 年 10 月 17 日

(2) 調査地：アメリカ合衆国(サンフランシスコ州)

(GP 運営実行委員長 松平千佳)

§ 調査 I : 第 50 回 International Play Association 国際大会におけるポスター発表及び

HPS 養成校スタンモア・カレッジとの HPS 養成教育に関する連携に向けた調査・協議

1. 第 50 回 International Play Association に参加して

ウェールズのカーディフで開かれた International Play Association(以下 ; IPA)第 50 回大会に参加するため、渡英した。IPA は、子どもの遊ぶ権利を広く社会に訴えるために作られた国際団体であり、子どもの権利条約を制定した国連の関連団体でもある。

大会には 4,000 人を超える遊びを研究する研究者や実践家が世界各国から集まっていた。それぞれが遊びをテーマにした、何がしかの活動あるいは研究に従事しており、雰囲気はとても素晴らしく暖かで、意見交換や討論も非常に活発であった。

まず、プレイセラピーを中心としたセッションに参加した。グランモア大学には、プレイセラピーあるいはセラピューテックな遊びに関して学習が可能なコースがあるとのことであった。HPS が行う治癒的な遊びとリンクするところが多いと感じた。もちろん、HPS はセラピーを行うわけではなく、全ての子どもを対象としているが、プレイセラピーの 1 つの型でもあるノン・ダイレクティブ・プレイの理論と実践は、病院における日常の遊びと子どもへの対応に完全に当てはまる理論であると思う。

同じセッションにおいて、同志社女子大学の笠間教授による砂を使った活動報告も非常に興味を持った。また、このような活動が日本国内よりも海外において高い評価を受ける現実に、日本の遊びや子ども観の貧弱さを感じないわけにはいかない。

続いてのワークショップでは、北欧からの参加者やオーストラリアからの参加者に混じって、遊びを商業ベースにおいても説得性のあるものにすべきかどうか、あるいは税金を投入してまで子どもの遊びを守る必然性はどこにあるのか、という議論を行った。いつも病院で HPS のことや遊びのことを説明するときに感じる矛盾について、同じような矛盾を感じている他国の関係者と大いに議論できたことは、何よりも嬉しいことであった。



(IPA 国際会議の会場)



(世界中の子どもたちが書いた旗が飾られたエントランス；

正面に見える旗は日本の子どもたちが書いたものである)



(スウェーデン人、香港人、ドイツ人、オーストラリア人と日本人で作成した作品)

そもそも、遊びに目的や効果を求めることがすでにある種の虚無的な行為であり、遊びの目的は遊びに他ならないのであるが、遊びの重要性を知らない、あるいは忘れる大人が増えれば増えるほど説明する必然性が生まれる。そして、遊びが本来の姿から遠退いて行くという矛盾が生まれる。遊びは平和を作るものだから、子どもも大人も全ての者が平和な社会づくりを望むならば遊びの力を再認識しなければならないと考えた。HPS が行っている被災した子どもに遊びを届ける活動、「スマイル・プロジェクト」を紹介したポスターも好評であった。



(IPA 国際大会で発表した「スマイル・プロジェクト」ポスター)

2. National Association of Hospital Play Staff 総会に参加して

National Association of Hospital Play Staff(以下 ; NAHPS)の総会に参加した。参加者は HPS が 40 名程度、そして関係者が 10 名程度であった。ゲストスピーカーも 3 名呼ばれており、HPS の職能団体として話し合うだけでなく、HPS としての知識や技能を高める目的を持った大会である。

ゲストスピーカーの 1 人は、GOSH で摂食障害を持つ子どもを専門に看るチームに所属している小児科医であった。食べることと食べさせることは全く違う、という点から話は始まった。子どもが食べるように我々は援助すべきであって、食べさせることが目的ではないことを改めて認識した。

2 人目のゲストスピーカーは、子どもの情緒に寄り添う行為についてワークショップを行った心理士である。この内容は早速、次回の HPS 養成講座において活用していく。3 人目は、ロンドン大学付属病院で働く思春期を専門とする小児科医であり、慢性疾患の子どもたちの性の問題を取り上げた。多くの HPS が長期に入院する子どもや繰り返し入院する子ども、また CP など治癒が難しい障害を持つ子どもと性の問題を感じており、HPS として取り組むべき問題があるのではないかと感じているようであった。医師にとっても、HPS は子どもと性の問題について話し合える職種であると考えているようであった。

最後に、日本における HPS 養成教育の現状と課題について発表を行った。英国の HPS はとても大きな関心を持っており、日本の HPS の発展を見守っていることが伺えた。



(日本における HPS 養成教育の現状について説明する筆者)



(会場：ロンドン大学医学付属病院のレクチャールーム)

3. 英国 HPS 養成校スタンモア・カレッジとの意見交換及び連携

スタンモア・カレッジを訪問し、HPS 養成コースの責任者であるアリソンと HPS 養成について話し合った。現在、Foundation Degree に移行中の英国 HPS 養成は、スタンモア・カレッジにおいてのみ行われている。HPS 養成教育の在り方を様々な形で話し合うとともに、教育内容を比較検討し、今後の HPS 養成教育の方向性について協議した。なお、共通している基盤は、「遊び」と HPS が Reflective Practitioner であることであった。

この新しい Foundation Degree とは、学術的な学びと職場での学びを組み合わせた学位レベルの資格のことである。雇用者との連携により、すでにその職業に関連する技術、知識と理解を持っている人に対し、学問的な学びを付加するとともに、職場でのパフォーマンスと生産性(結果)を改善することを目的としている。

Foundation Degree は、ある特定の職業や専門職に焦点を当てた学位であり、HPS になる学びを通して、現在雇用されているスタッフやその役割を担えると思われるスタッフ、またはその職業に就きたいと思っている人に対し、その専門性と技術力を高めることを目的としている。Full Honors(学位)と比較すると、学習量は 1/2～2/3 程度で、とても柔軟な位置づけの学位であり、学生たちは全日で学ぶこともできるし、あるいはパートタイムで学ぶこともできることになっている。

日本の HPS 養成講座は社会人を対象としているため、このような柔軟で多様性を確保できる教育の在り方を今後も検討しなければならないと考えた。責任者のアリソン氏とは連携を約束し、研究を進めることとなった。



(英国スタンモア・カレッジ HPS 養成責任者のアリソン氏(左)と筆者)

HPS 養成教育を取り巻く環境は、英国の財政危機と関連し、厳しくなっていると考えられる。そのことは、以下のように、新しい HPS 養成コース受講生に対する教育責任者の挨拶からも伺える。

この新しい知識の源によろそおいでくださいました。

本 Foundation Degree に基づくプログラムは、働くすべての HPS のプロフィールを高めるために、HPS の専門技術と社会的地位を向上させることを目的に設置されています。現在 NHS の体系が目まぐるしく変化している中で、HPS が必要不可欠な専門職であることを NHS および他の医療職従事者に認識させ続けられることが最重要課題であると考えます。このプログラムは、経験豊かなスタッフと HPSET が何度も話し合い、つくられた革新的なプログラムです。

このプログラムが、ヘルスケア領域におけるプレイ・スペシャリストとしてのキャリアの第1歩に着手するために必要で刺激的なプログラムであることを願っています。

Debby Price

Field Lead

Primary Care, Public Health & Child

TVU

Laila Paulsen

Academic Liaison Manager

TVU

HPS 養成教育に関する基盤の確認や応用、新しい技術や国際的な協力など、複数の国や専門家との話し合いの結果は、今後の教育カリキュラムの開発に役立てていきたい。

§ 調査Ⅱ：Association for Play Therapy に関する現地調査及び

HPS 養成教育に求められる遊びの理論と技術

アメリカプレイセラピー協会(APT)の Annual International Play Therapy Conference 及びワークショップに参加した。

APT のワークショップには、アメリカ全土から約 3000 人のプレイセラピーに関心を持つ者が集まるとの話であったが、予想通りの盛況な大会であった。

HPS は、遊びの持つ治癒的な力を最大限に引き出す仕事をする専門職であり、プレイセラピストの捉える遊びや遊び技術は、HPS 養成教育にとっても応用できる理論や技術が多いことから、今回の現地調査を行った。100 種類以上のワークショップから参加したいものを選択してワークショップに参加する形式であったが、理論であったり方法論であったりと学ぶことは多くあった。

以下、主なワークショップに関する現地調査の結果を報告する。

1. Foundation of play therapy ; プレイセラピーの基盤と発展過程

このワークショップは、プレイセラピーの基盤を整理することを目的としていた。プレイセラピーを支える理論の類型化について話があった後、遊びの持つ効果、遊びの持つ治癒力、遊びがなぜ現代の子どもたちに必要なのかについて、レクチャーがあった。

遊びそのものが持つ力については、①遊びは肯定的な活動である、②Non Literary であること、③自発的な行為であること、④内的なコントロールが働くこと、⑤活発な関わりが起きること、⑥Intrinsically motivated であることの 6 つが挙げられた。

子どもにとって遊びとは、自分が扱え切れない大きな出来事を縮小化し、自分自身が扱えるサイズに落とし込むことであるとの考えは、HPS 養成教育が共有できる部分である。HPS にとって有効な情報としては、揃えるべき玩具や道具、パペットの治癒的な力について整理されたこと、また Playfulness という適性が示されたことが挙げられる。子どもが自分の気持ちを表すことを手助けするための遊びを、HPS は一層考えていかなければならない。

講師の Schaefer 博士は、アメリカプレイセラピー協会の創設者の 1 人であり、彼がプレイセラピストに必要な資質として挙げた Playfulness は、とても重要な要素であるとする。個人の Playfulness を測るメジャーを HPS 養成教育にも取り入れていきたい。

2. Engaging adolescents ; 思春期の子どもたちに対する活動と方法

このワークショップでは、思春期、青年期の子どもたちを対象としたプレイセラピーについて学んだ。自分自身の思春期を振り返った後、その時代を過ごす子どもたちに何が必要なのかを考え、講師から 4 つの要素が提案された。すなわち、①courage ; 勇気、②connect ; 関わりを持つこと、③capable ; できること、④count ; 存在を認められること、の 4 つである。

また、具体的で効果的な活動がいくつか提案された。

(1) 思春期を過ごした過去の状態を呼び起こし、思春期の子どもたちの葛藤を理解するための活動

(2) 関係性を形成するための活動

(3) 今の気持ちや困っていることを整理し、表現するための活動

(4) 他者の気持ちを知るための粘土を使った活動

(5) 要求を整理し表現するための活動

などの活動が紹介され、これを基に HPS 養成教育にも活用していきたい。

3. Marschak Interaction Method (MIM) ; 親子のアタッチメントを図り、強化するための活動

このワークショップでは、家族を対象としたプレイセラピーを学んだ。MIM は親と子どもの関係性について、6 つの遊びをベースとした課題を一緒に取り組んでもらうことにより、親子のアタッチメントを強める大きな効果がある。この療法は、およそ 25 回のセッションを通して行われる。

また、課題は 4 つの領域から図られる。すなわち、(1)Structure (子どもの安全に配慮し、温かな雰囲気の中で枠組みを形成できるかどうか。構造を組み立てられるかどうか)、(2)Engagement (関わり)、(3)Nurture (労わりや、子どもを癒したり、親を労わったりする態度を見る)、(4)Challenge (年齢にあった課題を設定したり、課題に対して取り組む工夫や提案ができるかどうか) の 4 つである。

親子関係において、課題が存在するかどうかを分析するためのこの方法は効果的であり、支援が必要な場合のカギとなる行動も具体的に示された。これは子どもの子育て支援にとっても有効な方法であると考ええる。

その他には、Theraplay(セラプレイ)という方法論について調査する機会を得た。これは、療法という捉え方よりも、トラウマや問題を抱える子どもとその家族のセルフエステームを高めるために有効な遊び活動であり、今後開催される Theraplay ワークショップに参加し、HPS 養成教育へと活用していきたい。

(資料 1)

28TH ANNUAL INTERNATIONAL **PLAY THERAPY CONFERENCE**

October 11-16, 2011



Mental Health Professionals Applying the Therapeutic Power of Play

(資料 2)



ANNUAL ASSOCIATION FOR PLAY THERAPY INTERNATIONAL CONFERENCE

OCTOBER 11-16, 2011

Introduction

The Association for Play Therapy (APT) promotes the value of play, play therapy, and credentialed play therapists. It supports those programs that promote the understanding and valuing of the effective practice of play therapy, recognition of diversity in play therapy, and development and maintenance of a strong professional organization. For more information and to register online, visit www.a4pt.org.

2011 Conference Goals

Counselors, psychologists, social workers, marriage and family therapists, and other mental health professionals within and outside of the United States will:

- Earn continuing education credit for licensure and play therapy credentialing purposes.
- Learn more about play therapy research, theories, and techniques, and how play can help them to better communicate with and treat developmentally appropriate clients, particularly children.
- Browse and shop for play therapy books and videos, toys and games, and other products and services from exhibitors.
- Attend special receptions, forums, and other activities.
- Play and network within the play therapy community, especially with colleagues, authors, presenters, and others.

Key Conference Notes

- Curriculum primarily includes three- and six-hour workshops with some two-hour evening workshops.
- Prior to departing for the conference, all registrants must download and print online workshop handouts.
- Based upon our most recent conference survey and proposals received, curriculum specifically emphasizes three practice areas:
 - Adolescents (see workshops W-3, W-7, Th-8, F-6, F-8, S-6 and S-12).
 - Adoption / Foster Care (see workshops Th-12, F-11 and S-6).
 - Attachment (see workshops W-2, Th-1, Th-5, F-1, F-2, S-1 and Su-2).
- Relax, visit with friends and colleagues, or connect for workshops, meals, and social activities in the Connections Lounge (see page 15).
- Honor Key Award and Gold Branch Award recipients Leadership Academy graduates, and new and retiring APT officers during Recognition Forum (12:15pm, Saturday, October 15).

MEETINGS & FORUMS

Bolded activities are open to all conference attendees.

Date	Time	Activity	Overview
Wed Oct. 12	7:00 pm - 8:30 pm	Research Forum	Investigators Jennifer Baggerly, Dee Ray, and Janine Shelby provide progress reports regarding those studies pursued within the APT Research Initiative with the assistance of the consultant funded by Foundation for Play Therapy contributions.
Thurs Oct. 13	9:00 am - 4:30 pm	APT Board of Directors	Conduct semi-annual business meeting.
	6:30 pm - 8:00 pm	General Reception	Welcome and network with conference attendees.
Fri Oct. 14	9:30 am - 10:25 am	Conference Program Committee	Review policies and procedures by which conference program is designed.
	10:30 am - 11:20 am	Foundation Board of Directors	Conduct annual business meeting.
	12:15 pm - 1:30 pm	General Session	Directive or Non-Directive? Which approach is best? This question has provoked strong emotions and potentially divisive responses within the play therapy community. But is this the right question? Hear a discussion that may transform play therapy beyond this debate.
	3:00 pm - 5:00 pm	Branch Presidents	Conduct annual business meeting.
Sat Oct. 15	12:15 pm - 1:30 pm	Recognition Forum	Acknowledge 2011 Key Award, Gold Branch Award, and membership campaign award recipients, 2011 Leadership Academy graduates, and new Registered Play Therapists and Supervisors. Chair Mary Anne Peabody will pass the gavel to her successor, Mary Fry.

「病児・障害児への専門的な遊び支援を考えよう!」

— すべてのこどものために、すべてはこどものために —

文部科学省大学教育推進プログラムとして採択された「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発」では、事業の一つとして医療福祉関係者、HPS、一般市民等を対象に毎年シンポジウム、またはセミナー&ワークショップを開催している。2011 年度においては、①日本及び英国における専門的な遊びの技術を広く一般に示し、HPS がチームの一員として小児医療に寄与する方法を明らかにする、②ホスピタル・プレイ活動において、その中心となる「プレイ・プレパレーション」の概念を新たに定義し、HPS 養成教育プログラムの中核を担うカリキュラムへと反映させる、以上 2 点を目的に 2012 年 2 月 11 日（土）、本学を会場にシンポジウムを実施した。

当日のプログラムは、本事業の成果に基づき、専門的な遊びを通じて病児や障害児への支援を検討する内容で、午前には基調報告に続き二つの講演が、昼食時にはランチョンセッションが、午後にはシンポジウムが行なわれた。会場には、1 日のみの開催であったにも関わらず、北は北海道、南は福岡から 175 名を超える人々が参集し、各プログラムの発表者との間で積極的な意見交換がなされた。

開会にあたっての静岡県立大学短期大学部学長・木苗直秀の挨拶要旨は次のとおりである。

「全国各地より多くの皆様にお越しいただき、誠にありがとうございます。本学 HPS 養成講座は現在第 7 クールを迎え、これまでに 2 冊の HPS 関連書籍や事例集の発行など、着実に実績を積み重ねてきました。本日は、英国 HPS のキャロライン先生講演の他、笠間先生の講演やワークショップ、シンポジウムを予定しております。ご来場の皆様が〈すべてのこどものために、すべてはこどものために〉を支える各種プログラムを通じ、充実した 1 日をお過ごしいただけるように願っております。」

なお来賓として、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長・樋口聰氏を予定していたが、業務都合により欠席となった。しかし氏からは書面によるメッセージをいただいた。その内容は、本事業の目的並びに本学の取り組みに対する評価・謝辞であった。

基調報告は、本学の松平千佳（運営実行委員長）が行なった。氏は最初に、本事業に対して支援と協力をいただいている方々に対して感謝の辞を述べた。続いて本事業は英国のカリキュラムを参考として、日本の教育文化・環境に則した教育プログラムの構築とキャリアラダーを念頭に置いた教育体制の構築を目指してきたこと、現在は、HPS 養成教育の対象者と内容、目的を明確化し、教育カリキュラムと教育科目、教育結果（アウトカム）を導き出している段階であることを紹介。これらの結果は、本年度末までに整理し、体系化してまとめる予定であることを報告した。

講演 I は、Caroline Fawcett 氏による「HPS が実践を通して捉えた遊びの力」であった。氏は Poole General Hospital, Poole Hospital NHS Foundation Trust, Dorset／上級 HPS, Team Manager で、同月に実施された HPS 養成講座の講師を務められてもいる。講演はキャロライン氏の英国における経験を

踏まえながら、最新の知見を引用して「遊び」の価値と可能性を言及した。合わせて、遊びは子どもにとって衣食住と同様に不可欠なものであることを、個別事例や最新の学術研究を通して解説された。また、子どもが困難にぶつかった場合の対処方法の学習や、人を信頼し自分に自信を持つ方法、自分の感情をコントロールしたり、合意を形成することを可能にするモデルとして、ホスピタルプレイモデルを提唱し、そこでは信頼とオープンコミュニケーション、遊びの三つが重要になることを指摘した。

午前プログラムの最後は、IPA 日本支部副代表・ワールド評議員、同志社女子大学教授の笠間浩幸氏が講演をされた。氏の講演は「子どもの遊びと大人や社会の役割」と題し、子どもが遊びを通して運動能力や想像力、創造性、社会性、科学的思考といった様々な力を獲得する様子を紹介するものであった。前半では、砂場で遊ぶ子どものビデオを上映し、遊びの質、量、環境その何れもが子どもにとって極めて貧しい状況に陥っていることを指摘された。後半では、子どもにとって遊びとは何か、大人や社会は子どもの遊びをどのように捉え、何をすべきなのか、これらの問題について砂場の歴史的な背景と子どもの権利の観点から論考された。

ランチョン・セッションは、子どもにやさしい医療の実践について、本学 HPS 養成講座修了生による実演（ワークショップ）を展開した。各セッションでは、専門的な遊び（Play）の力を体験的に捉えられるように、参加者が実際の玩具や医療器具に触れ、HPS による解説が加えられた。

各セッションのテーマ、及び担当の HPS は次のとおりである。

＞セッション A：子どもにやさしい採血方法 ―抑制しない座位で行う採血―

（名古屋市立大学病院 HPS 小川綾花・松井幸子）

＞セッション B：効果的なディストラクション・ツールの選び方

（日本医科大学多摩永山病院 HPS 奥山ふみ／

あいち小児保健医療総合センターHPS 棚瀬佳見・平野祐子）

＞セッション C：治癒的な遊び ―シリンジ・ペインティング他―

（静岡県立総合病院 HPS 小長谷秀子／静岡済生会総合病院 HPS 望月ます美）

＞セッション D：プレイ・プレパレーションの実際

（東京都立小児総合医療センターHPS 杉渕早苗）

現在、本学 GP では三つのモデル部会を中心に「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発」を目指しているが、その一つである産学連携による小児医療モデル部会では、6 病院を対象に玩具を貸与し、子どもの療養環境整備に寄与する共同研究を実施してきた。午後に行われたシンポジウムでは、これらのうち 3 病院がパネリストとなり、これまでの研究活動成果を報告。それらについてはキャロライン氏から講評をいただき、その後、質疑応答が行なわれた。各パネリストの発表概要とキャロライン氏の講評は次のとおりである。

＞パネリストⅠ：「子どもの笑顔とやさしく楽しい療養環境を整える」（静岡県立こども病院）
村上勝美・中山陽子・諏訪部和子・杉山全美・寺田智子

HPS の活動基盤は、日常の遊びである。遊びを通して、子どもとのコミュニケーションを図り、子どもの思いを汲み取り、信頼関係の構築ができてこそ、プレパレーションやディストラクションは有効に機能する。本研究ではプレパレーションに視点を置き、ツール及び玩具の効果的な活用方法について検討した。遊びを通して看護師やCLS と多職種チームが形成され、継続的な物理的社会的環境の整備が実現された。

＞パネリストⅡ：「障がいのある子どもの遊びの広がり」（大阪発達総合療育センター） 河本鈴代・市川雅子・西尾恵美・田坂なお子・齊藤智子・藤崎由枝美

障がいがあることは、単に生活の不便だけでなく、子どもにとって大事な様々な体験をする機会を少なくしていることは明らかである。本研究では五つの事例を通して遊びの可能性を追求し、子どもたちの楽しい気持ちを汲み取り、心を開放し安心して遊ぶことができるように安全な環境を整えた。今後は、HPS が環境と人とを子どもに結びつける役割（コーディネーター）としての位置付けを明確にしたい。

＞パネリストⅢ：「腎臓疾患の子どもが受ける治療に対するプレパレーション・ディストラクションの効果」（総合病院聖隷浜松病院） 大矢佳代・小島広江・畑井郁子

子どもの発達年齢に則したプレパレーションや、少しでも気が紛れ、和やかな雰囲気の中で検査が受けられるようなディストラクションの実施を目的として、①玩具や教材を活用した検査室、プレイルームの環境整備、②各児の発達に見合った遊び計画の立案に取り組んだ。通算 14 例を対象とした結果、子どもやその両親が検査に対して積極的な協力者として関わることで、子どもの不安や恐怖の軽減に結び付くことが明らかとなった。

＞キャロライン氏の講評概要

子どもとその家族に対する支援、そして他職種への影響について焦点を当て、HPS による遊びの視点が深く考察されていた。また、制作したツールや玩具が医療者へも浸透しており、HPS の仕事の範囲が拡大していることは高く評価できる。各取組に対して敬意を表すると同時に、今後はきょうだいや障害のある子どもへの継続的な支援も期待したい。

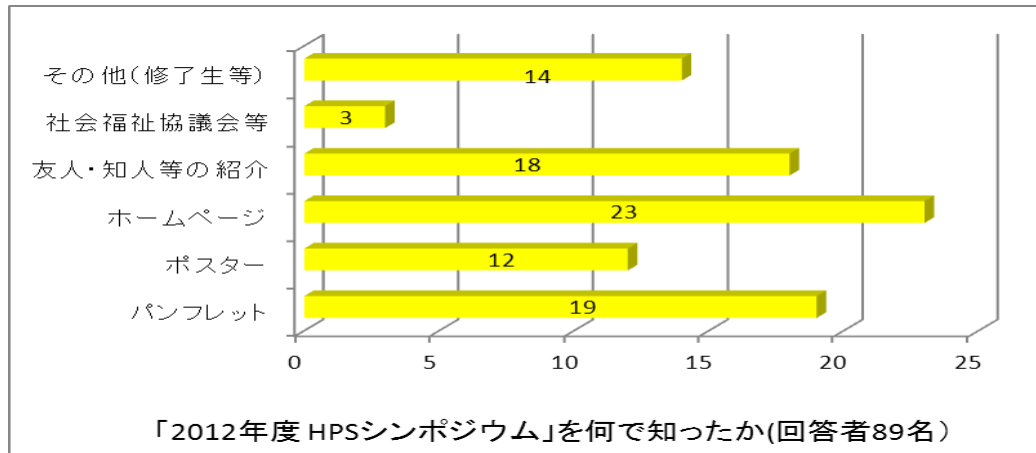
本シンポジウムの目的は、小児医療チームの一員として HPS の役割を明確にし、ホスピタル・プレイ活動に対する社会的な認知を促進することであった。各プログラムでは、大学関係者から教育学的な基盤による評価や意見が、医療関係者からは実践的な評価や意見が表出された。それらは、教育と医療の隣接領域を担う HPS 養成教育プログラムの確立において有意義なものになる。さらに、福祉や医療に関心を持つ一般参加者も多数あり、ホスピタル・プレイの効果的な啓蒙活動にも繋げることが出来た。これらの点で、シンポジウムは当初の目的を達成することができたと言える。

2012 年度 HPS シンポジウム アンケート集計結果

1. シンポジウム開催を何で知ったか。

2012 年 2 月 11 日に開催された「HPS シンポジウム」には、175 名余りが参加した。この中で、アンケート回答者は 89 名であった。

本イベントを知った媒体についての結果は、下図のとおりとなっている。図で明らかなようにホームページを媒体とした割合が最も多く、HPS に関心を持つ人々の多さが示唆された。また、知人・友人からの情報も多く、HPS の意義や必要性を認識している人の多さも確認できた。



2. 「当日のプログラムに対する感想、意見、質問」については次のような意見が寄せられた。

- ・ HPS の現場での活動（独自）や事例を学ぶことができ、勉強になった。25 名
- ・「ランチョンセッション」は、少人数で実際に体験でき、現場で今活動している内容が紹介されてとても良い勉強になった。時間を有効に過ごせた。9 名
- ・ 講義だけでなく映像で実際を知ることができ、自分の病院でも取り入れたいと思った。8 名
- ・ キャロライン先生の講義を聞き、英国 HPS の活動状況や事例を聞いてよかった。7 名
- ・ 修了生として色々な現場での活動を知り、勇気づけられた。いろいろなアイデアがあり、学ぶことが多かった。また、小児医療の環境づくりも参考になった。8 名
- ・ 笠間先生の講義とワークショップは大変興味深く楽しかった。6 名
- ・ とても内容が濃く勉強になった（ディストラクション・ツール、プレパレーション、日常の遊び支援、採血の方法等）。6 名
- ・ HPS の必要性を学び、もっと社会に知らせていくことが必要であると感じた。導入したいと考える病院は沢山あると思う。6 名
- ・「砂場の話」で子どもの遊び方、成長のプロセス、保育士としての支援の在り方を学ぶことができ、大変印象深かった。5 名
- ・ 子どもにとって遊びの重要性を再確認した（改めて痛感した）。4 名
- ・ HPS という業種の仕事をはじめて知ることができた。3 名
- ・ HPS 活動について具体例・生の声を聞いたことで、イメージを形にすることができた。3 名
- ・ HPS のことを病院スタッフがもっと理解していくことや連携・協働の重要性を学んだ。3 名

- ・「抱っこ採血」の方法・利点を知ることができ勉強になった。3名
- ・人的・物的環境作りの大切さを改めて考えさせられた。早速改善を試みたい。3名
- ・全体として学会発表のように堅苦しくなく、アットホームな感じで楽しく参加できた。3名
- ・2年前と比較するとHPSの活動が進歩し、広がってきていることが実感できた。2名
- ・様々な病院でのHPSの活動を知り、日本で小児医療のプレパレーションが進んでいると感じた。さまざまな場所でHPSが活躍している未来を想像すると幸せな気持ちになる。2名
- ・「全ての子どものために、全ては子どものために」のテーマの重要性を感じた。2名
- ・全てのプログラムがとても興味深く良かった。2名
- ・活動報告はとても参考になり、資料も豊富で（遠方から）来た甲斐があった。2名
- ・他病院での実際の事例が聞けて、早速応用したいと思った。2名
- ・事例集や資料が豊富で、今後も活用できると思った。2名
- ・一日の内容がとても勉強になり、外部のものでも参加できたことが嬉しかった。
- ・HPで知り一般参加したがひとり1人の子どもが大切にされていることを知り、感激した。
- ・看護師として採血時のプレパレーションやディストラクション等を具体的に学べた。
- ・事例発表、プレゼンテーションの方法など今後の活動の参考になった。
- ・修了生たちの実践に感激・感動した。こんなリアルで素敵な実践が出来る職種は他にないと思った。改めてHPSになりたいと思った。
- ・東北の震災被災地で多くのHPSが活動している話を聞き、感動した。
- ・必要性を感じながら業務上できないと考えていたが、実際の話やツールを見ることが出来参考になった。
- ・職場にHPSがいないので看護師としてプレパレーションやディストラクションを行っていく上で参考になった。
- ・重症心身障害児への遊び提供はどうしていいかわからなかったが、今日学んだことを生かして行きたいと思った。
- ・一般の子どもの保育にも生かせる内容がたくさんあった。

3. 「改善してほしいこと、付け加えてほしいこと」には、次のような意見が寄せられている。

- ・ランチョンセッションは、もう少し時間にゆとりがほしい。時間配分や昼食の段取りが悪かった（内容が濃いだけにもったいない）。19名
- ・ランチョンセッションの流れが分かりづらく、移動に時間がかかり、途中からしか聞けなかった。9名
- ・受付の混雑がひどく時間が無駄にかかった。8名
- ・昼食の手配が悪かった。ランチが並んでいてももらえなかった。ランチBOX等で手渡す等工夫してほしい。7名
- ・時間がタイトで十分聞けないことがあった。2日に分ける等工夫してほしい。6名
- ・ランチョンセッションの発表は4つではなく3つでよかったのではないかな。5名
- ・ランチョンセッションの資料がほしい。ホームページ等に載せてほしい。3名
- ・昼食を食べる時間がなかった。別個にしてほしい。3名

- ・午後のシンポジウムは資料に示された内容だけでなくプラスαがほしかった。3名
- ・講堂（会場）が寒かった。調整して欲しかった。3名
- ・事前に資料が入手できれば、読み込めて発表者に質問もできたと思う。2名
- ・きょうだい支援、患者家族へのHPSがどうかかわっているか知りたい。2名
- ・急性期の入院患児へのHPSの関わり方と知りたい。2名
- ・各種ウイルス感染が注意される中、個装でないサンドイッチ配布は見直すべきである。2名
- ・HPSが他専門職より遊びにさらに専門的に関わる職種ならば、その違いを知りたい。2名
- ・治療にかかわる遊びだけではなく、発達保障を捉えた遊びについても知りたい。
- ・在宅病児支援についての関わりも知りたい。
- ・映像は動画の方が子どもの様子などが分かりやすいので動画を増やしてほしい。
- ・ランチョンセミナーで行ったことを全体場で聞きたい（全部聞けなかったのだ）。
- ・全体的にディスカッションの時間がもう少しほしい。
- ・被災地での活動とHPSとの関連が分かりづらかったので、背景なども加えた方がより理解しやすかった。
- ・心理学や精神科の先生の話も聞いてみたい。
- ・玩具が高価なので、産学連携で購入したものを、全体で評価し、有用なものはまとめて安く購入できるとよい。

4. 「その他」に寄せられた意見は次のとおりである。

- ・このような機会を他地区や他大学でも作ってほしい（有料でも可）。7名
- ・HPSの活動を知り、HPSについて具体的理解が深まった。4名
- ・来年も開催してほしい。4名
- ・HPS養成講座は働きながらも受講できるような時期・時間帯にしてほしい。4名
- ・シリンジペイントについて（水鉄砲でも同じではないか。効果があるという実証、評価方法はなにか。針がつくと子どもは怖がるのではないかな等）4名
- ・医療現場を子どもに優しい医療が行えるように変えていきたいと思った。3名
- ・自分の勤務する病院で、今日の学びを生かして、病棟フタッフと協力して遊びの工夫をしていきたい。3名
- ・HPS研修を受けたいと思っているが、年々希望者が増えており受講できるか心配（倍率、選考基準等を知りたい）。4名
- ・HPS養成講座を受講したい。とても勉強になる1日だった。2名
- ・HPSは病院（子供たち）にとって必要不可欠な職種であると確信した。2名
- ・いろいろな人にHPSの必要性和役割についてより広く知ってもらいたい。2名
- ・HPS養成講座の受講は、看護師と保育士だけなのか。他の関連職種にも広げてほしい。2名
- ・準備が大変だと思うので感謝している。2名
- ・HPSのいる病院でボランティア活動ができる場所はあるか（神戸市等）2名
- ・自分ができることが見つかった気がする。2名
- ・現場において多職種が手を組むことで広い視野で物事が見えると思った。

- ・たくさんのツールやデザイン、おもちゃなどを美大などから募集してみてはどうか。
- ・病棟保育士として働いているために講習を受けることができず、残念。
- ・病棟保育士と HPS の役割と連携はどのように行われているか知りたい。
- ・プレパレーションは誰が行っていくのが患者のためによいか。
- ・HPS でなく、現在いる看護師・病棟保育士が連携していく方法もあると思う。
- ・CLS との違いや HPS の具体的な活動（1 日のスケジュール）について教えてほしい。
- ・子どもと関わって感じたことを医師・看護師にどのように伝え、協力しているのか知りたい（医師・看護師の反応、変化も知りたい）。
- ・「抱っこ採血」を自分の病院でも取り入れていきたい。
- ・HPS が複数いる施設や HPS に理解のある医師がいると聞き、HPS の働くフィールドが広がっていると感じた。
- ・養成講座パンフレットや詳細情報がほしい。
- ・保育士養成を行っているが、HPS の基礎力をつけるために自分も頑張らなくてはと思った。
- ・このようなシンポジウムに無料で参加でき、事例集や資料も得て大変勉強になった。
- ・このような機会があれば積極的に参加し知識を得て、日々の業務に活かしていきたい。
- ・HPS の活動は素晴らしいが、現実には日常業務で 1 日が終わり、子どもとの理想的なかわりができな現場とのギャップに落ち込むが、勉強したことを一つでも実践し、病棟保育を高めていきたい。
- ・参加者とスタッフの区別、受付の混乱等解消してほしい。
- ・HPS でなくともすでに行っていることがあった。
- ・医療現場で働く保育士による HPS 取得の必要性を知りたかったが、まだ理解できなかった。
- ・HPS、CLS、医療保育専門士の違いを知りたい。
- ・日本の医療は長年、抑制して行われており、既に治療が嫌な子にはどうしたらよいか。

<以下、修了生の主たる意見>

- ・自分では気付かないことで新しい気付きが沢山あった。こうした機会を増やして欲しい。シンポジウムは自分の活力になっている。5 名
- ・HPS は現場では孤独だが、久しぶりに仲間に会えて先輩や友人の頑張りを知ることができ、自分も頑張ろうと思える。3 名
- ・修了生同士が遠方、かつ名前もわからないため、交流・親睦が深め難い。
- ・困った時に相談出来るサポート体制を確立してほしい。
- ・今、とても悩み自分のあり方、HPS に向いているのか、毎日考えている。

(GP 運営実行委員 立花明彦)

遠隔地双方向授業システムの安定的運用と教材・啓発用ホスピタル・プレイ映像制作

本年度効果的教授法モデルの開発における大きな柱として、教授法研修や双方向型アクティブラーニング手法を見据えた、遠隔地双方向授業システムの安定的運用と教材・啓発用ホスピタル・プレイ映像の制作が挙げられる。

平成 21 年度より導入してきた遠隔地双方向授業システムは、近年の情報通信技術 (ICT) を取り入れた先駆的・実践的な教授法の実施に重要な役割を担っている。本学はこれまでの試験的实施を繰り返し、経済的なコスト（講師や学生の旅費等）の削減、時間ロスの低減（講師や学生の移動時間の節約等）を実現してきた。こうした成果を踏まえ、本年度は安定的なシステムの運用と複合的なシステムへの拡充を目標とした。

また本年度は、HPS の役割や活動を効果的に説明、教授する教材資料として、視覚的な教育効果が期待される映像制作 DVD の完成を目指した。映像 DVD は、効果的教授法モデル開発の範囲に止まらず、各モデル開発の成果を取り入れて、「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発」全体の推進へと寄与できる内容を目標として制作した。

1. 遠隔地双方向授業システム及び総合的な情報通信システムの運用

1) 目 的

- (1) 遠隔地双方向授業システムの安定的運用
- (2) 既存システムと連携した無料通信ソフト Skype の導入

2) 実施結果

- (1) 平成 23 年度 HPS 養成講座における本システムの活用

昨年度に引き続き、HPS 養成講座における試験的運用を経て、当該システムの安定性と信頼性を確認した。なお、実施内容は、下記のとおりである。

- 1. 日 時：平成 23 年 11 月 1 日(火)～平成 24 年 2 月 24 日(金)
- 2. 場 所：静岡県立大学短期大学部 101 講義室
- 3. 参加者：静岡県立大学短期大学部、神戸大学、川崎医療短期大学
- 4. 使用システム：sony-pcsXG80、DM-Encoder、sony-pcsXG55
- 5. 運用状況：

HPS 養成講座の講義は、遠隔地双方向授業システムが確立された静岡県立大学短期大学部 101 講義室をメイン会場として実施された。101 講義室は、これまでの試行錯誤を経て昨年度、遠隔地双方向授業システム及び関連環境が確立された拠点である。

メイン会場となる静岡県立大学短期大学部を中心として、サブ会場 2 地点（神戸大学、川崎医療短期大学）と、多地点遠隔地双方向授業システムを活用した講義を実施した。今回は実施に際し、昨年度の課題であった（1）講義形態に応じたマイクの配置や使い分け、（2）教室風景のサブディスプレイ同時表示による講義資料への影響について、改善を図った。

まず、音声集音マイクについては、講師用と受講生用の2系統を準備し、マイクの集音性能に合わせて対象者からやや距離を置き、床に近い場所へと設置した。その結果、通信先へも明瞭に音声伝達され、また講師が拡声器を使用した場合であってもハウリングを生じることは無かった。続いて、教室風景は基本的に講義スライド表示されたディスプレイと講師の様子を通信先へと送信し、質疑応答や演習形式の際には教室全体を映像化することで対応した。

また、本学ではバックアップ・システムとして sony-pcsG70 及び DM-Encoder を導入しているが、sony-pcsXG80 による通信システムが確立されたため、昨年度に引き続いて DM-Encoder による期間中の講義配信(ストリーミング)及び録画を行った。その内容は、本学 HPS 事業関係者に対する HPS への理解深化にも寄与し、拡充機能としての効果的な運用が実現された。

6. 課 題：

高度情報通信システムが拡張されたことに伴い、今回の実施によって2つの課題が示唆された。

1 つは、通信容量の限界に伴うパケットロスの問題である。すなわち、学内ネットワークの容量限界を超えた情報量が一度に使用された場合、画像や音声の劣化、接続の中断が生じる。このため、優先度の高いシステムに多くの情報量を振り分けなければならず、拡張した機能に支障を来す恐れがある。将来的な解決策としては、別系統の通信ネットワークを準備する、あるいは各システムの情報量を最小限に止めるなどが考えられるが、何れも今後の検討課題となっている。

もう1つは、昨年度と同様に、システムの複合化に伴うトラブル時における対処方法の確立である。使用者に限定されないトラブルシューティング・マニュアルの作成が喫緊の課題となっている。

(2) 無料通信ソフト Skype を導入した情報ネットワークの運用環境の構築

1. Skype の導入

Skype は専用ソフトを PC にインストールし、Skype 使用者間が無料で音声通話またはビデオ通話を利用できる通信システムである。通信に必要な機材はカメラとヘッドセットのみであり、設備コストが少なく個人利用が可能のため、国内外を問わず多くのユーザが存在している。

したがって、国境を越えた遠隔地との研究交流において、Skype は非常に優れた利点を有している。さらに、遠隔地双方向授業システムとの連携を視野に置き、本学では Skype によるビデオ通信を恒常的に可能とした情報ネットワークシステムを構築した(図1)。



図 1. HD ビデオ会議システムと Skype の連携

2. Skype 通信による HPS 養成講座特別講義の実施

- ・ 日 時：平成 24 年 2 月 16 日(木)11:00~12:00
- ・ 場 所：静岡県立大学短期大学部 101 講義室
- ・ 講 師：Deborah B. Vilas (米国ニューヨーク州在住、CCLS)
- ・ 対象者：平成 23 年度 HPS 養成講座受講生 16 名
- ・ 内 容：

平成 23 年度 HPS 養成講座において、Deborah 氏を特別講師として招き、Skype ビデオ通信を利用した演習を実施した(図 2)。講義中は終始安定した通信が確保され、日本と米国双方において対面式のコミュニケーションを図ることが出来た。



図 2. Deborah 氏による Skype を利用した特別講義

2. 教材・啓発用ホスピタル・プレイ映像制作

1) 目 的

ホスピタル・プレイの効果的な教授や啓発活動において、視覚的な素材は学習者の理解促進とともに、教育力向上にも寄与するものである。そこで、HPS 養成教育事業や学生及び医療福祉関係者を対象とし、ホスピタル・プレイの目的や役割、機能が比較的短時間で表現された DVD(映像)を制作する。

2) 制作手続き

DVD 制作にあたり、下記内容について収録、編集した。

- (1) HPS 養成講座(第 7 クール)の講義風景
- (2) HPS によるホスピタル・プレイの実際活動場面
- (3) HPS 関係者、医療関係者へのインタビュー など

3) DVD の内容と構成

DVD 全体の収録時間をおよそ 10 分間に設定し、その中で HPS の役割や活動内容、遊び(Play)の持つ働きを中心に、実際の活動映像やナレーションを織り交ぜた内容とした。

本 DVD に収録された内容及び構成は、下記のとおりである。

表 1. 教材・啓発用ホスピタル・プレイ DVD の内容と構成 (収録時間：約 10 分)

セクション	内 容	備 考
本学の紹介	大学背景をスライド提示	—
HPS 養成講座の紹介	講座撮影風景を提示	撮影動画の活用
文部科学省 選定プログラムの紹介	本学 HPS 事業の概要を スライド提示	ナレーションによる詳細説明
HPS の役割	HPS 活動写真のスライド提示	ナレーションによる詳細説明
HPS の専門技術	説明スライドと写真の提示	ナレーションによる詳細説明
遊びの意義	説明スライドと写真の提示、 HPS による実際活動の様子	ナレーションによる詳細説明
ディストラクション	HPS による実際活動の様子	撮影動画の活用
プレイ・プレパレーション	HPS による実際活動の様子、 写真のスライド提示	撮影動画の活用
遊びの様子	写真のスライド提示	ナレーションによる詳細説明
医療者の声	医療者（医師、看護師）への インタビュー内容提示	撮影動画の活用
HPS の声	HPS への インタビュー内容提示	撮影動画の活用
子どもとご家族の声	子どもへの インタビュー内容提示	撮影動画の活用
HPS 養成講座受講生の声	HPS 養成講座受講生への インタビュー内容提示	撮影動画の活用
メッセージ	本学 GP 運営実行委員長への インタビュー内容提示	撮影動画の活用

4) 活用方法

ホスピタル・プレイの啓発事業の他にも、本学学生向けの補助教材及び教授法研修や小グループによる双方向型アクティブラーニング学習法として活用することができる。

視覚的素材及び短期間映像の有効点を最大限に活用し、例えば本学及び提携大学の学生に DVD 映像を視聴させ、そこから得られた評価によって、HPS に対する学習者の理解度やモチベーション、さらには今後の教授法の改善点等を把握することが可能となる。

(GP 運営実行委員 吉田直樹, 研究員 森 裕樹)

ホームページの運用

高度情報化の現代において、インターネットの有効活用は喫緊の課題である。一昨年度及び昨年度は、本学学生や教員、小児医療関係者、さらには一般市民などあらゆる閲覧者を想定し、簡素で分かりやすい情報提供に努めてきた。その結果、本学 HPS 専用ホームページを通じた学生や一般閲覧者からの問合せが増加し、本事業の広報活動において一定の効果が得られた。

本年度も引き続き、ホスピタル・プレイに関する本学の取組や活動状況を広く発信するため、HPS 専用サイト (http://bambi.u-shizuoka-ken.ac.jp/hps_site/index.html) を本学 Web 上に展開し、インターネットを活用した効果的な広報活動を実施した。まず、昨年度と同様に、HPS 事業成果の写真やコンテンツを充実させ、更新回数を増やすことで可能な限り最新情報を提供できる体制を整えた。全体のメインとなるトップ画面には、当該ホームページのメニュー一覧と各種リンク機能を整理し、閲覧者の興味や関心に沿う形で情報提供に努めた。これに伴い、HPS 養成講座の開講や HPS シンポジウム開催の折には、当該ホームページが非常に有効な宣伝媒体となり、HPS 関係者のみならず多数の一般市民や学生から問合せ、申込みがあった。

その一方で、事業実施年度を積み重ねるにつれ、閲覧者の中には本学 HPS 養成講座修了生や小児医療専門職、HPS に強い興味を示す学生など、HPS あるいは HPS 養成教育事業に対して深い理解を持つ閲覧者も増加傾向にあった。このような対象者を鑑み、本年度は新たに下記コンテンツを新設し、HPS について様々な習熟度を持つ閲覧者に対応できる体制を整えた。

1) HPS の目的・役割：

ホスピタル・プレイ・スペシャリストの目的や役割、そして本学 HPS 事業に関する内容について、全ての閲覧者を想定した表現を用いて表現した。また、子どもと医療に関わる問題を「メッセージ」として提示し、その上で遊び(HPS)の必要性について言及した。

2) ブログの新設：

HPS 事業全般について閲覧者や関係者から寄せられた質問内容、問合せ内容について、迅速かつ的確な回答を行うため、ブログを新設した。当該ブログを活用することにより、本事業の改善や広報促進へと繋がった。

3) 専用掲示板の開設：

本学 HPS 養成講座修了生の情報交換及び研究議論の場として、専用掲示板を開設した。昨年度の日本 HPS 協会発足に伴い、各 HPS が現在抱える課題や問題が一層共有され、またその解決に向けた意見交換の場としても積極的に機能した。なお、専用掲示板を経由した情報は、当該事業における教育プログラムの開発へと反映された。

(HPS 事務局)

ホスピタル・プレイ研究活動支援

1) HPS 修了生による職能団体「日本ホスピタルプレイスタッフ協会」の活動

平成 19 年度から開始された HPS 養成講座は、今年度までに第 1 クールから第 7 クールまで実施され、合計 89 名の修了生を送り出している。修了生たちの出身地は静岡県下のみならず、東海、関西・中四国・九州、関東、東北地域まで広がっており、各々の職場や地域で養成教育プログラムでの学びを生かした活動が積極的に展開されている。

養成講座修了生の中には、各々の子どもの発達や症状の特性に応じたディストラクションやプレイ・プレパレーション技術を開発・実践し、それらを生かして医療スタッフの一員として活躍している者もいる。しかし、全ての修了生が必ずしも HPS の専門性を生かした活動を十分展開出来ているわけではなく、HPS を取り巻く厳しい人的・物的環境の中でせつかくの学びを生かすことができていない修了生もいる。多くの修了生が孤軍奮闘し、試行錯誤しながら活動しているといっても過言ではない。

こうした中で、各修了生からお互いが連携し、情報交換を行い、理論と実践を蓄積する活動等を展開する組織を形成する必要性が唱えられるようになり、2010 年 4 月 24 日には日本ホスピタル プレイ スタッフ協会が結成された。本会は、子どもに優しい医療を確立し、病気や障がいを持つ子どもたちに“あそび”を通してより良い支援を行うために、研鑽と情報交換、相互の親睦を図ることを目的とした。そのため、全国を関西、関東、東海・中部の 3 ブロックに分けて活動することとし、趣意書、規約等の決定を行った。本年度は、6 月に第 2 回総会を開催し、新役員（会長、副会長、各ブロック代表）を選出して各ブロック単位の研究会や在宅支援活動、情報交換そして関連学会や研修会での積極的な発表を行うことを確認した。

2) 研究活動の推進

修了生の中には、HPS としての活動をカンファランスや職場研究会に資料として提出したり、保育や医療系の関連学会及び研究会に発表する者も徐々に増えてきている。

また、論文形式にまとめ、各学会誌や研究誌に投稿する者もいる。これらの活動は、自らの実践を理論化し、普遍化する力量を高めるだけではなく、HPS の意義や役割を多くの関係者に広く知らしめるためにも極めて有効である。

しかしながら、今までこうした研究活動を展開した経験が少なく、優れた実践がありながらも理論化することを躊躇してしまう場合が多かった。そこで、教育 GP 運営実行委員会ではこれらの研究活動を積極的に支援する体制を組み、事例研究の方法、抄録や論文の作成方法をアドバイスしている。

本年度、東海・中部ブロックでは、昨年度に引き続き月 1 回定期的に集い「事例研究会」を開催している。7 月からは関東ブロックで月 1 回の「事例報告・検討会」が定期的に行われるようになった。ここでは、毎回輪番で発表者が自ら担当する事例を発表し、参加者とのディスカッションを通して内容を深め、「事例研究」にまで高めていく作業を行っている。

加えて、その場で小児医療や HPS を巡る情報の交換、各々の職場の課題や悩みの相談、在宅支援活動や独自活動の報告なども行われている。関西ブロックは、事例研究会にはなっていないが、今年度 2 回ほど修了生の集いを持ち、お互いの職場報告や情報交換を行っている。各ブロックでのこうした活動は、多くの HPS が遊びの力を信じ、子どもにとって優しい医療を展開するために、理論的・実践的な力を与え、モチベーションを高める場となっている。

さらに、この活動の成果は、今年度発行した「ホスピタル・プレイ・スペシャリスト事例集(第 2 号)」にまとめられ、第 1 クールから第 6 クール修了生による 20 編の著作となった。

(HPS 事務局)

資料

■ 平成 23 年度 HPS シンポジウム（平成 24 年 2 月 11 日）

開会挨拶



木 苗 直 秀
(静岡県立大学短期大学部学長)

基調報告



松 平 千 佳
(GP 運営実行委員長／静岡県立大学短期大学部准教授)

講 演 I



Caroline Fawcett
(Poole General Hospital, Poole Hospital NHS Foundation Trust, Dorset
／上級 HPS, Team Manager)

講 演 II



笠 間 浩 幸
(IPA 日本支部副代表・ワールド評議員／同志社女子大学教授)

HPSによるランチョン・セッション



ランチョン・セッションまとめ



江 原 勝 幸

(GP 運営実行委員／静岡県立大学短期大学部准教授)

シンポジウム - 「子どもにやさしい療養環境を実現するために」 -



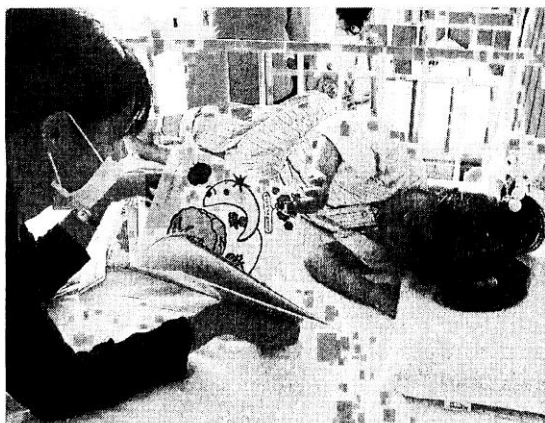
閉会挨拶



田中丸 治 宣

(静岡県立大学短期大学部部長)

入院の子「遊び」で癒やす



食事がうまくできなくなった子に、絵本で遊びながら、食べる
ことの大切さを伝える桑原さん＝静岡市葵区の県立こども病院

不安ほぐす専門職、県内でも活動広がる

遊びを通じて、病気の子どもたちの不安を和らげる医療の専門職が、県内の医療機関で広がっている。米国発祥のチャイルドライフスペシャリスト（CLS）と英国発祥のホスピタルプレイスペシャリスト（HPS）だ。医療スタッフの一員として活動の幅を広げつつある現状をみた。

静岡市葵区の県立こども病院の診察室。2歳の男の子が採血が始まる気配を感じると、「やだ、やだ」と足をバタバタして泣き始めた。看護師2人が男の子をベッドに寝かせて押さえる。すると同時に、絵本を持ってきた女性がそばに寄った。「これは何？」ポケモンの絵本を見せ、優しく話しかけた。

2009年から同病院の

CLSとして働く桑原和代さん33。男の子の体をさすりながら「ピッチュウがいるよ」と声をかけ続ける。一瞬、泣きやんだ。その瞬間に看護師が男の子に注射。男の子は「痛い」と泣き叫んだが、桑原さんはさかさず、別のポケモンを指さして「これは何？」。また静かになり、無事に採血が終わった。

「頑張ったね」と、ご褒美のシールを渡せば、男の子に笑顔が戻った。「ひたすら子どもに安心感を与えることに徹して、痛くて泣くのは仕方がないが、一方的に嫌なことをされて、こんな所は嫌だと思われなくなるようにするのが大切」と桑原さん



午後、遊び道具が入ったバッグを手に病棟に向かった。生後1カ月から入院を繰り返しての高井茜ちゃん5は、東日本大震災の恐怖から食事をきんぐと食べられない状態が続く。桑原さんは食事の大切さを伝える絵本を読み聞かせ、遊びながら食事の大切さを伝えた。

骨髄移植後の合併症で塞ぎ込んでいた8歳の女の子のベッドでは、一緒に人形を作って話しかけた。女の子の母親（42）は「娘も桑原さんには会いたいと言っている」と話して涙が止まらなかつた。同病棟の北山浩嗣医師は「子どもたちが積極的に治療に向き合うようになった。家族のケアもしてくれて、病院では欠かせない存在」と話す。

CLSは米国で始まった専門職。HPSもほぼ同様の専門職で、英国の資格だ。ともに資格取得には海外留学が必要で、桑原さん

治療前向きに／家族ケア効果も



手術直前に、手術室前に設置されたプレイコーナーでHPSの小長谷さん（左）と遊ぶ子ども。リラックスして麻酔で泣く子ども減ったという＝静岡市葵区の県立総合病院

も04年に同病院の看護師を退職。米国に留学して資格を取得し、09年に戻ってきた。ただ、診療報酬の対象外の業務のため、県内でCLSがいる病院は、こども病院以外は浜松医大、県立静岡がんセンターの2カ所にとどまっていた。

しかし、県内では県立大短期大学部が08年から、独自にHPSを育成する取り組みを始め、状況が変わってきた。

保育士と看護師を対象にした養成講座で、146、211時間の講義と実習を課し、これまでの6回の講座で73人が修了した。県立総合病院や静岡済生会総合病院、県立こども病院、聖隷浜松病院でHPSとして活躍するようになった。

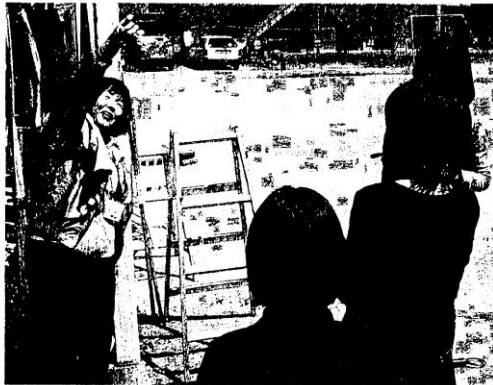
1期生の小長谷秀子さん（49）は県立総合病院で働く。同病院では手術室前に「プレイコーナー」を設けた。子どもが手術を受ける際には、小長谷さんだけで

なく、看護師や麻酔医師らもキャラクター付きの術衣で出迎える。手術前に遊ぶことで麻酔で泣く子どもが減ったという。

同病院の神原啓文院長は「HPSがいることで院内の関心も高まり、小児科全体で遊びを通して子どもに接する動きが出てきた」と評価する。その上でこうした専門職員が診療報酬や病院の施設基準になれば新たな雇用へつながるが、それには役割が広く周知され、資格者をもっと育てないといけない」と指摘した。

昨年末、全国のCLSやHPS、小児科医が「子ども療法支援協会」を設立した。日本版CLSやHPSとも呼べる「子ども療育支援士」を育てようというもので、今年4月からは養成講座も始まっている。専門職員の存在や重要性が、少しずつ認められてきている。

（本多昭彦）



シャボン玉で子供たちと遊ぶHPSの女性
(左)(岩手県山田町で)＝HPS事務局提供

病院に入院している子どもの遊び相手
を務め、心のケアに当たる県内の「ホス
ピタル・プレイ・スペシャリスト(HPS)」
たちが東日本大震災の被災地を訪
れ、被災児童を精神面で支えている。

被災児童おもちゃで支援

医療担当者ら心のケア

HPSは、病気やけがで入院している子どもたちと一緒に遊び、不安感などのストレスを解消する医療現場の担当者で、看護師や保育士の有資格者らが務めている。英国の取り組みを参考に、国内では県立大短期大学部が資格認定を行っている。

県立短大の松平千佳准教授(45)は「被災地の子どもたちは親を亡くするなどして強いストレスを感じている。体を動かす遊びで適度に疲れ、ぐっすり眠ることで良い循環が生まれる」と考え、被災地を訪問できないか、知人のHPSに声をかけて回った。

呼びかけに応じたHPSの資格を持つ女性3人とボランティアの計5人は、4月29日～5月1日、宮城県気仙沼市や同県南三陸町、岩手県大船渡市など4市2町の避難所を訪問。紙風船やシャボン玉遊びの道具、県立短大の学生約30人が手作りした落書き帳など7種類の遊び道具600人分を子どもたちに手渡した。

子どもたちは当初、見知らぬ5人を警戒する様子だったが、しばらくすると甘えたり、一緒にたこ揚げをして走り回ったりして、笑顔を見せるようになった。

現地を訪れた県立総合病院HPSの小長谷秀子さん(49)は「運動場が駐車場や仮設住宅として使われている上、おもちゃも流されて遊ぶ手段がない子どもが多かった」と話す。震災で親

を亡くした9歳の女兒は、しゃべり始めると津波で流された自宅の話などを30分間話し続けたといい、「被災地では子どもの話し相手

が足りていない」との実感を強めた。

HPSたちは6月中旬にも宮城県気仙沼市を訪れる計画だ。



魚やクジラが床一面に描かれたテラス

〓静岡市駿河区の静岡済生会総合病院

病棟前テラスに魚の絵

静岡済生会入院の子どもも描く

静岡済生会総合病院（静岡市駿河区）の小児病棟前のテラスの床に、子どもの療養環境について研究している千葉大学院工学研究科の柳沢要准教授の元で学ぶ大学院生らがデザインした絵が描かれた。「使われてい

なかった場所が明るくなった」と、病院職員や利用者を喜ばせている。テラスは、周産期センターや産婦人科などが入った北館の一角にある。大学院生が考えたデザイン画の中から、小児科の医療スタッフがイメー

ジに合った作品を選んで採用した。クジラと地球の周囲に色とりどりの小さな魚が戯れる図案で、木材で作った船型のベンチも設置し、海をイメージした。材料費の一部は、同病院と産学連携を結んでいる県

立大からの研究費を充てた。22、23日の作業日には大学院生のほか、医師や看護師、静岡済生会看護専門学校（静大）の学生らも加わりペンキを塗った。入院中の子どもも、母親と一緒に魚に模様を描いた。加藤実千代看護師長は「病院にいても子どもは外で遊びたがる。病状が良くなったらたくさん使ってほしい」と笑顔を見せた。

平成 21 年度文部科学省
大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム
「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発」

平成 23 年度 事業成果報告書

執 筆 者

【本学 GP 運営実行委員会】

運営実行委員長

松 平 千 佳 短期大学部社会福祉学科准教授

運営実行委員

江 原 勝 幸 短期大学部社会福祉学科准教授

立 花 明 彦 短期大学部社会福祉学科准教授

吉 田 直 樹 短期大学部歯科衛生学科准教授

事務局

短期大学部 HPS 事務局

〒422-8021 静岡県静岡市駿河区小鹿 2 丁目 2 番 1 号
静岡県立大学短期大学部 GP 運営実行委員会 HPS 事務局
TEL/FAX : 054-202-2652
HP : http://bambi.u-shizuoka-ken.ac.jp/hps_site/index.html
